

拒否的言動のある認知症患者へユマニチュードを用いたケアの効果—3 事例とのかかわりを通して—

山形県 三川病院

Key Words

認知症ケア ユマニチュード

はじめに

認知症高齢者へのケアの際、介護抵抗等の拒否的言動がしばしば見られる。X病院認知症治療病棟に入院している認知症患者においても、排泄ケアを実施する際にスタッフの腕を叩く等の介護抵抗がみられ、研究者らはどのようなケアの方法が良いのか試行錯誤を重ねていた。

一方、認知症ケアの1つであるユマニチュードはケアの有効性について報告され¹⁾、医療機関や介護施設でも普及しつつある。そこで、当病棟でもユマニチュードを用いたケアの導入により、実施するケアが患者に心地よいものとして届き、患者の拒否や介護抵抗を軽減できるのでないかと考えた。

I. 研究目的

拒否的言動のある認知症患者にユマニチュードを用いたケアが、介護抵抗を含む拒否的言動の減少に効果があるかを検証すること。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

事例研究

2. 研究対象者

X病院認知症治療病棟に入院している拒否や介護抵抗がある患者から3名を選定した。

3. ユマニチュードを実践する上で重視したこと

ユマニチュードは、「見る」「話す」「触れる」「立つ」が4つの基本の柱であるが²⁾、本研究では以下の内容に絞り実践した。その内容は、1) 視線をとらえて話しかけること、2) ケアを実施する前にケアの準備の時間を作った。具体的には(1) ポジティブな言葉を用いて40秒程度コミュニケーションを図ること、(2) 笑顔、柔らかいトーンで話しかけること、(3) 対象者を驚かせない為に伝

わる情報が少ない背中や上腕、肩を触れて話しかけること、3) 拒否的言動がみられた場合は、無理せずにケアを中止する、とした。ユマニチュード実施前の2週間、連絡ノートに上記の内容を記載した資料を設置すると共にカンファレンスの時間を用いてスタッフに先述したユマニチュードの内容を周知した。

3. データ収集期間

2019年1月10日から2月28日

4. データ収集方法

1) ユマニチュード実施前の対象者の様子

対象者3名に対して入浴介助、排泄ケア、口腔ケアを実施した時の介護抵抗を含む拒否的言動の内容についてスタッフから聞き取り記録した。

2) ユマニチュード実施中の対象者の様子

日勤帯において対象者にユマニチュードを用いて入浴介助、排泄ケア、口腔ケアを30日間実施した。その時の具体的な声かけ、スタッフの対応と対象者の反応を記録用紙に記述した。

3) ユマニチュード実施後のスタッフの評価

スタッフにユマニチュードを実施して効果をどのように感じたかを聞き取り記録した。

4. データの分析方法

本研究では、スタッフの介入する場面が一番多かった排泄ケアに絞りデータを分析した。ユマニチュード実施前後で排泄ケア時における対象者の反応の変化とスタッフの介入に着目し評価した。

II. 倫理的配慮

研究の協力を依頼するにあたり、研究の主旨、個人が特定できないように配慮すること、研究以外の目的に使用しないことなどを家族に文書と口頭で説明し了承を得た。なお、本論文について発表者らに開示すべき利益相反関係にある企業などはない。

III. 結果

1. A氏。80歳代女性。混合型認知症、HDS-R査定3点。

1) ユマニチュード実施前の様子

午後になると焦燥感がみられることがある。スタッフの声掛けの内容を理解するまで時間がかかり、スタッフ側のペースでケアを実施しようとするとA氏の焦燥感が強くなり易怒的になることがあった。

2) ユマニチュード実施中の様子

焦燥感が強い状態においては、視線を合わせても直ぐに逸らし拒否的な発言となった。しかし、トイレ誘導を一時中止し一緒に散歩を行いA氏に笑顔が見られた時に再度トイレ誘導すると拒否なくケアに応じてくれる場面がみられた。

2. B氏。80歳代女性。前頭側頭型認知症。HDS-R査定0点

1) ユマニチュード実施前の様子

トイレまでの歩行のため声掛けを行うがつじつまの合わない返答があった。車椅子から立ち上がらないことが多く、スタッフ2名で対応することもあった。スタッフのタイミングで脱衣しようとすると易怒的になることがあった。

2) ユマニチュード実施中の様子

視線を捉えて声掛けを行うがつじつまの合わない返答ある時は、車椅子から立ち上がらないことがあった。スタッフの挨拶に笑顔で挨拶を返す等、比較的疎通のとれる時は立位を取りやすく、衣類の着脱も自力で行っていた。

3. C氏。80歳代女性。混合型認知症。HDS-R査定1点

1) ユマニチュード実施前の様子

車椅子からの立ち上がりや便器に座るまで時間がかかり、介助を行おうとするとスタッフの手を叩く行為がみられていた。

2) ユマニチュード実施中の様子

スタッフの挨拶に「おはよう」と返答みられた。話の内容はかみ合っていないが笑顔で話し始め、トイレの誘いに「うん」と返答し視線もあった。トイレへ向かうと自ら立ち上がり、ケアに対して拒否はなく表情も穏やかさがみられることがあった。

4. ユマニチュード実施後のスタッフの評価

「視線を合わせ捉えることを意識し、患者のペースに合わせることで拒否なくケアを実施することができた」「ケアの準備の時間を作ることでトイレに行くという声掛けを理解できなくても、一つ一つの動作を説明しながら介助することで拒否な

く応じてくれた」とスタッフがユマニチュードの効果を実感し特に「視線が合った時にケアを受け入れてもらいやすかった」と話すスタッフが多かった。一方で、「ユマニチュードの効果というよりもケアを受け入れやすい対象者の状態やタイミングの影響が大きいと感じた」という評価もあった。

IV. 考察

すでに有効性が明らかになっているユマニチュードは、本研究においても介護抵抗を含む拒否的言動を減らす効果があることが明らかになった。

ユマニチュードでは、対象者とケアの合意を得る「ケアの準備」の時間を作り、合意のない「強制ケア」は行なわないことを基本理念としている³⁾。本研究においても、スタッフは対象者と挨拶を行い天気の話をするなど、ケアの準備の時間の設定が拒否的言動の減少につながったと考える。

スタッフの評価において対象者の視点を捉えることの重要性を感じていたが、「認知機能が低下した状態の人にしっかりと視線を合わせ続けると、こちらの問いかけに対する相手の反応が変わる」⁴⁾とされ、対象者の視線をとらえようとするスタッフの試みが対象者の拒否的言動を減らすことにつながったと考えられる。

VII. 研究の限界と課題

本研究を行うにあたり、ユマニチュードの技法習得のための学習が不十分でスタッフ全体で統一した関わり方を行うことが出来ないところもあった。ユマニチュードの技法について今以上に病棟全体で学び続けていく必要がある。

VIII. おわりに

患者の一見拒否的に思える言動にも理由がある。合意のないケアに対する拒否とも考えられる。その理由を常に考え、今回の研究を活かし患者個人の尊厳を守れるよう日々関わっていきたい。

引用・参考文献

- 1) 橋爪由花：ユマニチュードのケア技術を取り入れた効果—暴力行為のある認知症患者とのかかわり、日本精神科看護学術集会誌 61(1), p 436-437, 2018.
- 2) E. ジネスト, R. マレスコッティ, 本田美和子訳：ユマニチュード入門, p40 医学書院、2014.
- 3) 前掲論文3) pp100-101
- 4) 前掲論文3) p107